筑波大学附属病院　茨城県立中央病院

筑波大学附属病院　茨城県地域臨床教育センター　［広報誌］

茨城県地域臨床教育センターだより

2022 Vol.42

〒309-1793　茨城県笠間市鯉淵6528　☎0296-77-1121　令和４年５月１日発行（第42号）

新年度を迎えて

教授・センター部長
鈴木　保之

専門領域 ■ 心臓血管外科
循環器外科

2019年に始まったコロナウイルス感染拡大から約２年半が経過し、未だに収束の兆しがなく対応に翻弄される毎日が続いていることと思います。このセンターだよりが届く頃には少しでも状況が改善していることを期待しています。

第19回の茨城県地域臨床教育センターの講演会の内容をのちに報告しますが、本院で初期研修を終了された小田有哉先生に「プロフェッショナリズム」―医師としての基本的価値観とは―という演題で講演をいただきました。初期臨床研修医へのメッセージを踏まえた講演内容でありましたが、後期研修医、専門医にも心に響く内容で、医師としてのプロフェッショナリズムの重要性に関して再認識をした方も私を含めて多かったことと思います。

講演の最後に１月上旬にニュースとして報じられた、アメリカでの豚の心臓を人に移植する異種移植（Heart xenotransplantation）ことについて、倫理的な問題があるのではと述べられていました。今から約40年前、一番最初にHeart xenotransplantationを行なったのはJames Hardy（University of Mississippi）とされ、患者は術後早期に亡くなられたことが報告されています。私自身の記憶では、神奈川県立子供病院で小児心臓外科の研修を行っていた1980年代、当時、左心低形成症候群に対してNorwood手術が考案されていましたが、日本ではほとんど助からない状況がありました。生まれてきた患児の治療の選択肢として世界的に、１．Norwood手術を行う、２．心移植を行う、３．保存的治療（見取り）ということが言われていました。Norwood手術の成績がNorwoodの施設以外で極端に悪かったこと、心臓移植の成績は比較的良かったことなどからその当時は心移植もかなり重視されていたと思います。だだし新生児の心移植はその当時もdonorの数は極端に少なく、その状況を打開すべくサル（baboon）の心臓を移植することがLeonard Baily（Loma Linda University）によって行われました。このニュースを当時の神奈川県立子供病院で小児心臓外科部長の伊藤健二先生が期待を持ってみていると話されたことを覚えています。残念ながら患児は20日後に亡くなりましたが、その後倫理的な問題から、かなりxenotransplantationについてアメリカの医学会は慎重な対応をとってきたこと、人から人への移植（allotransplantation）が定着していったことからあまりxenotransplantationは報告されなくなったと思います。左心低形成症候群についてはNorwood手術の成績も向上し現在は少なくても保存的治療（見取り）を選択することはないと思います。

日本でも心移植のdonor不足が深刻な状況ですが、海外でも同様で、それに対して機能の向上が著しい植込み型の人工心臓で長期間の補助を行うことで対応しているのが現状です。昨今の遺伝子解析、治療などの進歩はめざましく、またxenotransplantationの拒絶反応に対する研究も進歩して、40年前とは異なりdonor不足を解消する手段としてのxenotransplantationが今後定着していくのかもしれません。今回のニュースとなった患者が長期の生存がえられることを期待しています。

さて、新年度となって１ヶ月が過ぎたことになりますが、医師としてのプロフェッショナリズムを肝に銘じながら医療及びセンターの運営に携わっていこうと思いますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。

第19回筑波大学病院附属 茨城県地域臨床教育センター講演会の報告

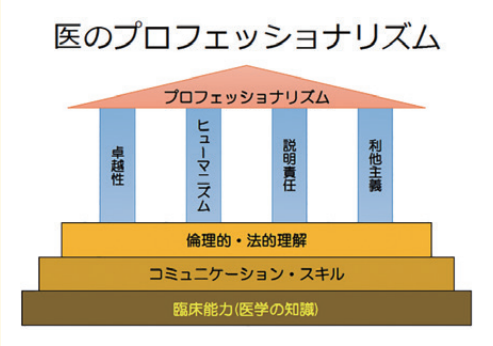
教授・センター部長
鈴木　保之
専門領域 ■ 心臓血管外科
循環器外科

2022年１月13日に茨城県立中央病院臨床研修棟A会議室及びオンライン（Cisco Webex）を併用し、神栖済生会病院　小田有哉内科医長をお招きして『プロフェッショナリズム』―医師としての基本的価値観とは― という演題名で講演会を開催いたしました。小田有哉先生は2011年自治医科大学卒業で、初期研修医の２年間、当院で初期研修を行ったのち、なめがた地域総合病院勤務、日本医科大学千葉北総合病院では救急医として勤務され、常陸大宮市国民健康保険美和診療所では僻地在宅医療を中心に活動され2021年４月から神栖済生会病院　内科医長としてご活躍中です。

今回の講演は医師のプロフェッショナリズムについて、よくこの説明の際に用いられる図を示し先生ご自身の経験をもとにわかりやすく解説していただきました。

臨床能力（医学の知識）・コミュニケーション・スキル、倫理的・法的理解の土台のもと卓越性、ヒューマニズム、説明責任、利他主義の柱によりプロフェッショナリズムは支えられているという模式図です。学生の時に「知らないことは罪である」という教員の言葉を当時は理解できなかったが、研修中の救急患者の治療にあたって、その大切さを痛感したというお話は、私自身の経験とも重なり共感できるものでした。処方する薬について、患者の状況をよく把握していないと適切な治療に結びつかないことはコミュニケーション・スキルの重要性についてわかりやすく説明されていたと思います。意識のない患者の家族への説明で勿論わかりやすく、理解しやすいように説明したにもかかわらず「患者を物のようにあつかっている」と批判を受けたことでは、患者家族の心情を深く読み取る必要性を述べていたと思います。地域医療の定義はないという先生の意見にも賛同しましたが、地域医療を行う上でその地域のことをよく理解し、自らその中に入り込んで交流を深めることが大切であるということもとても重要なことと思います。これらの事柄に対して、初期研修医の意見も聞きつつ講演を行なっていただき、初期研修医にとってプロフェッショナリズムを理解する上で非常に参考になったと思いますし、また上級医・指導医の先生方にもプロフェッショナリズムを再認識する上で有意義であったと思います。

通常、年２回のセンター講演会を行ってきましたが、コロナ禍の影響もあり本年度はオンラインを活用しての講演会となりました。院内で対面で参加された方・院外からWebで参加された先生方、職員の方々、そして講演をしていただいた小田有哉先生にあたらめて感謝申し上げます。



筑波大学附属病院　茨城県地域臨床教育センター
〒309-1793　茨城県笠間市鯉淵6528　☎0296-77-1121
ホームページ　http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/